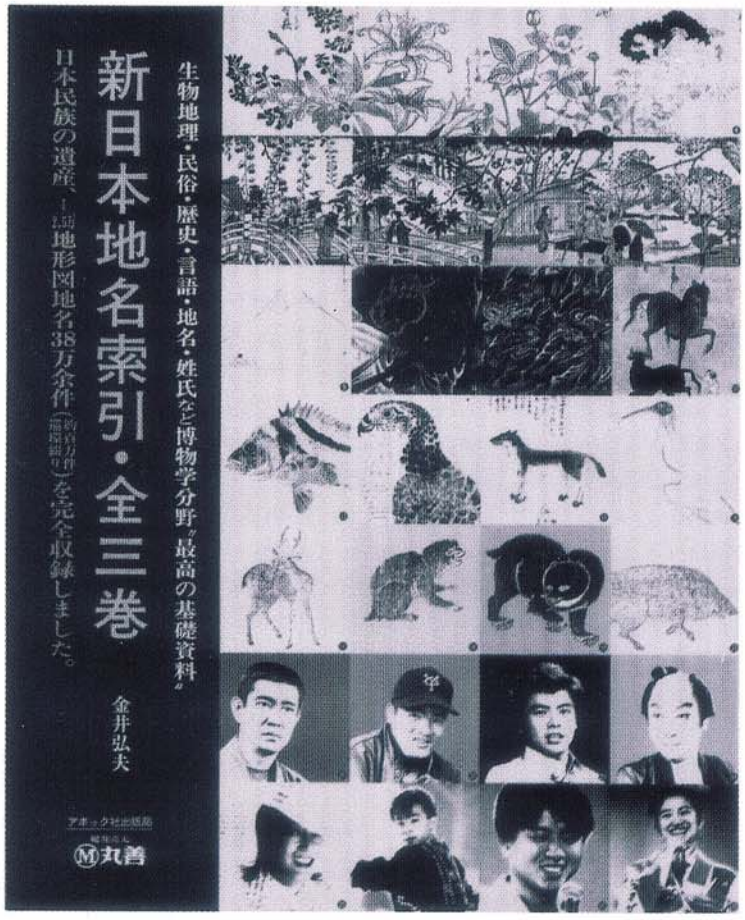
●植物研究雑誌　●月刊言語　●自然保護　●地図　●朝日新聞　●日本経済新聞　●週刊ポスト　●週刊読書人

第二刷

『新日本地名索引』全三巻

好評発売中

パブ資料



総発売元

丸善

〒103 東京都中央区日本橋2-3-10
Tel. (03)3272-7211 振替：東京7-5番

1994年5月

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

植物研究雑誌

□金井弘夫：**新日本地名索引 全3巻**（1. 五十音篇（24）＋2014 pp., 2. 漢字篇（上）（16）＋2634＋46 pp., 3. 漢字篇（下）（16）＋2588＋46 pp.）1993. アボック社出版局発行，丸善発売. ¥155,000（セット）.

本書は現在発行されている国土地理院2万5千分の1地形図に含まれている全ての地名とその位置を緯度と経度で示した索引である．新日本地名索引という題名から本書が金井さんの前書日本地名索引の改訂版のような印象を受けるかもしれないが，それとは異なる全く新しい本である．旧書では20万分の1から約12万4千件の地名が拾い出され，金井式位置座標値で位置が示されていたが，今度の本では国土地理院発行の2万5千分の1地形図を元地図として，そこから新たに約38万5千件の地名を拾い出し，それら地名の位置を元地図の緯度と経度で示している．これによって今度の新日本地名索引は直接に位置が示されていることになり，大変に使いやすいものとなった．第1巻は全地名を五十音順に並べたもので，いわばふつうの索引篇であり，最も使い易い部分である．第2-3巻は漢字篇で漢字による索引．ここでは地名を構成する漢字どの一字からでも元の地名が引き出せる方式が採用されている．そのために，項目数が膨大になり，2巻を要している．しかしこの方法は非常に便利であり，著者のアイデアに感心させられる．

金井さんは1958年に原・金井の日本種子植物分布図集第1集を出版した．このとき既に2万5千分の1を基礎とした今回の形の地名索引の必要を実感していたのではないか．35年来の想いが実現したのではないかと私は思っている．本書は，前書もこの点では同様であるが，植物地理学のみならず，日本の地名に関係する全ての分野で利用できるものである（宅配業界でも利用されているという）．日本の文化に貢献する基本図書と評価しても過言ではないと思う．

本書が収録の対象とした元地図は現在発行されている2万5千分の1である．元地図に載っていない有名な植物採集地もある．また，変更された古い地名も少なくない．これらは当然のことであるが，本書では探し出せない．金井さんにもう一度頑張っていただいて，次の地名索引では古い地名を拾い出すことも目標にしてもらいたいものである．というのは，標本のラベルにはその標本が採集された時代の地名が書かれており，変更された地名，特に村や町などの古い行政区画の地名はこの本では拾えないものがあるためである．しかし，実際には字（あざ）の地名はあまり変わらないので，その点で補えることが多い．一方，収録されている地名が膨大であるだけに同名の異地が驚くほど多い．このため字の地名だけに頼ると思いがけない間違いが生ずる．この点に関して，本書の紹介とは少し離れるが，利用者が注意すべき点を述べたい．例を挙げる方が分かり易い．明治から昭和20年頃にかけての好採集地に埼玉県（武蔵国）の平林寺がある．これは新座市野火止の平林寺であるが，本書には，同じ埼玉県平林寺が岩槻市にあって，野火止にない．このように，元の2万5千にはない地名の同名の別地が同じ県内にあることもある．たまたま気付いた例であるが，ホモニムの地名に注意が必要である．

最後になったが，学問の基礎として誰もが本当に必要としながら，これまで作られなかった，このような基本的索引を作り上げた著者に敬意を表したい．

（大橋広好）

月刊言語▽

月刊言語

●新・日本地名索引

金井弘夫著

「2万5千分の1地形図地名・38万余件完全収録」と本書の箱にうたってあるとおりの大冊である。集落名や山川の名など、ほとんどの地名が入っている。コンピュータで出力された地名と地図名・市町村名・位置データが収録してある。第1巻『五十音篇』が本体で、第2、3巻『漢字篇』は専門用語でいう KLIC (Key Letter In Context) である。おかげで、地名の読み方が分からなくとも引けるし、個々の構成要素や漢字も調べられる。地名の位置は緯度経度で指示してあるので、どの地図でも位置を特定できて便利だ。

元々の地名データはコンピュータに入っていて、分布地図作成プログラムと連動している。この機能を活用して作った地名分布図が宣伝用パンフレットにたくさん載っている。色々な地名の分布が分かって、実に面白い。もっと出力して論文にすれば、大きな貢献ができるだろう。

この地名索引は現在最大最詳のものである。公共図書館には必備の書である。

（井上史雄）

［アボック社・B5判第1巻2014頁、第2巻2679頁、第3巻2632頁・155000円］

自然保護
ひとと自然のかかわりを見直す
1994 FEBRUARY No.381
Nature Conservation Monthly ISSN 0386-4138

植物地理学の研究を発端に集められた日本中の地名

新日本地名索引 全三巻

●金井弘夫著 三巻一五万五〇〇〇円（税込み）
●アボック社出版局発行、総発売元丸善（☎03・3272・0390）

国立科学博物館・植物研究部長金井弘夫博士は、一三年前に『日本地名索引』上、下（アボック社）を刊行した。それは二〇万分の一の地勢図上の全地名を拾い、経緯度の座標で位置を示したものであった。当時の多くの推薦文を見ても、いかに広汎な方面から期待されていたかがわかる。氏の恩師、故原寛博士も、「こうした索引は、自らの研究のためだけでなく、広く各方面に便益を与えるところから出版にふみきった」と述べている。始まりは自らの植物地理学的研究の便宜のため、植物の産地を地図上に示そうとしたのであるが、それが多方面で活用された。今回の二万五〇〇〇分の一地形図による索引の、三八万余件の地名密度には西高東低の傾向があり、それが日本文化の東漸を示すのではないかというのも面白い。

『新日本地名索引』は、レッドデータブックや各地の調査を進めている自然保護関係者や本誌読者にとっても有力な基盤となろう。各地の図書館、学校などにもぜひ備えつけることをすすめたい。（沼田 眞・NACS-J会長）

自然保護△

地図 map

Vol. 32 No. 1 1994

「新日本地名索引」(全3巻)

金井弘夫編，アボック社刊，総発売元丸善。セット価格155,000円

本書は，2万5千分の1地形図の全地名の索引で，日本最大の地名索引である(以下『索引』と呼ぶ)。38万件という膨大な地名を収める。これを独力で完成された熱意と技術は敬服に値する。

1. 実用：個々の地名の検索

そもそもは著者金井氏の専門分野，植物学の標本採集地の検索のために企画されたという。コンピュータを駆使したために，以前なら考えられない短い年数で完成できた。コンピュータ出力がそのまま版下になっている。

なるほど微細地名・小地名探しにことに便利である。この『索引』で地名を探すと，その収録地図名＋行政区画＋経緯度が分かる。つまりどんな地図で地名を探すにも使える。生物学・地理学・方言学・民俗学・歴史学など，地名で地点が同定されるすべての関連分野に役立つ。アンケートで出身地を聞いて，どこの地名か分からないときなどにも便利である。もちろん一般にも役立つ。例えば「御巣鷹山」という名は最近有名になったが，手元の分県地図にもない。しかしこの『索引』で経緯度を知れば，位置がちゃんと分かる。また2.5万の図名が分かるので注文もたやすい。以上は，第1巻『五十音篇』の，地名の読みで引ける部分で，市販の地図帳の索引の拡張版というべきものである。

2. 『索引』の利点

この『索引』は，もっと便利にできている。第2，3巻『漢字篇』は，専門用語でいうとKLIC(Key Letter In Context)の形をとっている。地名の全文字を前後の文字をつけた形で配列してあり，どの文字からも引ける。例えば「左沢」のように読み方がわからない難読地名も漢字で引ける(漢字の音訓索引もついている)。目的の地名が「上田長」のように地名に分類要素がついているのに，地図ではただ「田長」になっているときには，「田」の字のところでも引ける。また「岬」など，ある漢字で終る地名も一覧できる。

このように，文字だけで引けるし，途中の一部分だけでも引けるので，植物標本の文字がかすれたときはもちろん，郵便・宅配便などの宛名が不完全なときにも使える。

以上のような利点があるから，購入すべき機関として，国土地理院・海上保安庁水路部・地図メーカー他の地図作成機関，放送・出版などのマスコミ機関，公共図書館，さらに地図売り場などの販売関係があげられる。また地図学者にも必携であろう。

3. 地名データベース

第2，3巻を見れば，個々の文字の頻度も分かる。コンピュータのよさで，すでに別表として集計したものがあり，個人的に見ることができた。この一覧表は，漢字を定める国語審議会や，JIS，さらにワープロメーカーにとっては，ぜひとも入手すべき資料だろう。

『索引』を読んでいて気づくことは，同一地名が全国に散らばっていることだが，また地名の読みも多様である。「こうや」という地名は「高・興・荒・耕・幸・後・向・合・郷＋野・屋・谷」のような組合せがあり，同音多字の典型である。一方「角田」のように多様に読める同字多音の例も多く見つかる。この『索引』を読んでいくと，日本の地名の複雑さがよく分かる。

4. 地名分布図

実は，この地名コンピュータデータの最大の特徴は，出版された『索引』には直接反映されていない。地名データが分布作成プログラムと連動していて，この『索引』の任意の地名を，日本地図上にプロットできる。動植物にちなむ地名や，名字と同じ地名などが，『索引』の宣伝用カタログに日本地図として収録されている。また全地名の分布密度も図示されている。カタログだけでも入手の価値がある。

このデータベースを活用すれば，地名学への貢献の可能性は計り知れない。トキのように，地名と実物の対応を見ることもできるし，「沢」と「谷」が東西日本で分かれるような，地名同士のはりあいの関係も読み取れる。出版された『索引』を読み取って手作りもできるが，元々のデータからコンピュータで処理すれば早いし，正確で，きれいだ。卒論などに好適だろう。

コンピュータプログラムは，一定の範囲内で公開できるとのことである。科学史をひもとくと，特許などをとらずに公開した無欲な科学者が印象に残る。そのおかげで科学が進歩したといえる。今回の地名データも，今後の学問の発展に寄与するだろう。

20万分の1地図所載の地名すべてをデータにした前著(1981年刊)は第1回地名研究賞を得たが，今回の大著も賞賛に値する。 (井上史雄)

385,000の地名と場所 すぐわかる

植物学者が大地名索引

10年かけた労作 宅配業にも朗報

なかったから自分で作った 本業の研究に必要

にゅうすらうんじ

金国のほとんどの字（あざ）名まで含んだ約三十八万五千の地名とその位置がたちどころにわかる、という本が登場した。『新日本地名索引』。全三巻、計七千三百余㌻。重ねると厚さは三十㌢近くになる。地域文化の研究者や流通業者から重宝がられているこの本、編者の金井弘夫さん(六三)は、国立科学博物館の植物研究部長。植物学者が、なんでまた、こんな労作に挑んだのか。

（東京科学博物館・木脇みのり）

「人の群れない所が好きなんです」と金井弘夫さんは自分を分析する。専門の植物分布や由来を調べる分野も、遺伝子を解析するといった新しい分野に比べて地味で少数派だが、むしろそれが気に入っている。

研究の初めから地図と格闘してきた。

この仕事では、植物標本と、その採集地を対応させることが大事だが、地名が地図で見つからないことも珍しくない。「探し損ないなのか、そもそも地図にない地名なのか」。見つければ見つけたで、「他の場所に同名があるのではないか」との不安が残る。

地名索引さえあれば解決する。しかし、世の中にそんなものは、なかった。それなら、自分で作るしかない。七二年、在外研究から科学博物館に赴任した時、索引作りにかかった。

地図から地名を拾い出す仕事は、学生を五、六人雇った。ところが、「干」が「千」になったり、「糠」が「糖」に化けたり。最後は、すべて自分でチェックしなければならなかった。

ざっと十年。苦労の末にできた索引を出版してくれるところはないかと、五社ほどの大手出版社に持ちこんだが、「売りようがない」と、断られた。

やむなく「懐具合と相談しながら」数年かけて地域別に自費出版。その後、植物標識会社のアポック社が出版を引き受けてくれた。

素人には、「どんなことに力を注いで専門の方は？」という疑問もわくが、当人は「どういう索引がないと、私の仕事は忌切れしてしまう。だれにも作ってもらえないものは、自分でやるしかない」と平然としている。もっとも「同僚らの手前、大っぴらにはやりにくかった」とも漏らす。

来春は定年。しかし、コツコツと集め続けた植物標本を分布図にする仕事は続く。地名索引はその強力な助っ人だ。

金井さんの専門は植物の分布を調べ、分布図を作る仕事。植物標本に記された採取場所を地図で探し、一つひとつ点を打つ――。

仕事とはいえ、楽ではない。地名と位置情報が一目で分かれば、パソコンで簡単に分布図ができると、二十年ほど前にこの仕事に入り込んだ。一九八一年に同じような『索引』を出版、今回は二度目。

今回の『索引』は、五十音順に並べたものと、漢字の字画で並べたものとの二種類からなる。地名の先頭にくる文字だけでなく、例えば三文字の地名なら、三つのどの文字からも引ける。

各地名は、緯度、経度だけでなく、県名・市町村名などもわかるようになっている。川や山、トンネルなども含まれ、電話帳のように、スキー場やサイクリングロード、温泉などを一覧することもできる。

『索引』は、多くの分野の研究者から歓迎されている。地名と姓氏の研究家、丹羽基二さん(七四)は「姓の八割から八・五割は地名から来ていると思われる。しかし、実証するには、姓と地名の分布の相関を示すデータが必要」といい、「私も苦労して約十三万四千件の姓の辞典を作りましたが、そこに今回の『索引』が出た。大きな基礎資料をプレゼントされたようなものです」と喜ぶ。

八一年に出した『索引』は二十万分の一の地図を基版してみると、反響は予想以上だった。

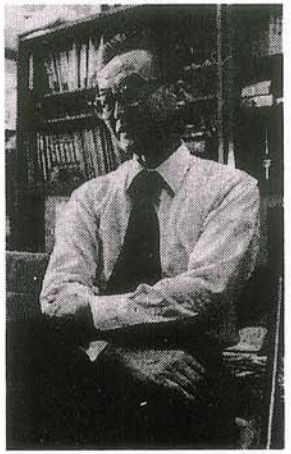
方言など地域文化の研究者だけでなく、宅配を扱う流通業界からも注文が飛び込んできた。地図好きを自任していた作家の故松本清張氏も愛用したとか。

新旧『索引』の出版元であるアポック社（本社、神奈川県鎌倉市）の毛藤俐彦（もうとう・くにひこ）社長(六〇)は「同じ地名が全国にいくつあるのか、といったことも一目でわかるし、単なる索引としてだけでなく、地名そのものの資料としても、幅広い分野で利用価値があると思う」と話す。

初版は三百三十部、価格は十五万五千円。「個人にはいささか高いが、図書館や研究所などが買ってくれれば利用価値は高い」と研究者たちは口をそろえる。

10年がかりで完成した『新日本地名索引』

金井弘夫さん



漆と萩の付く地名の分布図

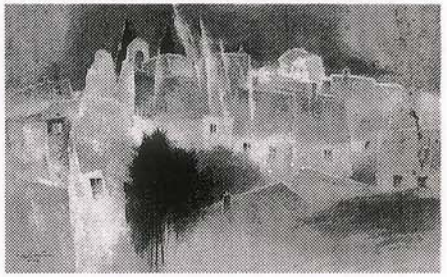
〈地名分布図〉

地名の全国分布も、『新日本地名索引』を使えば簡単にできる。

図は、「漆原」や「萩野川」など地名のどこかに「漆」「萩」の字が入った地名の分布図。実際の植物の分布図と比べれば、相関関係を調べることもできる＝アポック社提供

日本経済新聞社　1993年11月17日

文　化



中谷　竜二「エゾの家並み」（日展から）

数えたり！日本の地名38万

◇植物地理学の一助に「索引」を集大成◇

金井　弘夫

◻ ◻ ◻

まず地図4千枚用意

私が数えた日本の地名は三十八万四千九百五十九件である。二万五千分の一の地形図を北海道から沖縄まであわせて四千四百二十二枚用意し、そこに載った地名をしらみつぶしに拾い上げた結果である。

私はどのデータを五十音順と漢字別に整理した全三巻の『新日本地名索引』（丸善発売）を作った。二十万分の一の地勢図をベースに完成した八一年の『日本地名索引』（アボック社）以来、十二年がかりの仕事となった。

私は現在国立科学博物館に勤めており、本来の仕事は、植物地理学だ。端的に言えば、スミレが日本のどこどこに生えていて、どこそこには生えていないというような分布を調べる仕事である。

しかし植物の標本に書かれた産地をいちいち地図に当たって探すのは、思ったより骨のおれる作業だ。植物の名前を示すラベルに記された産地は、飛鳥山とか新潟県駒ケ岳といった程度で何県何町のドコソコとていねいに記してあるものはほとんどない。新潟県にも駒ケ岳はいくつもあるし、飛鳥山をもし知らなければ、日本中の地図に当たらなければならない羽目になる。

こんな苦労をするくらいなら、先にすべての地名を調べあげ、市町村名と経緯度を書き添えておけば、探す手間が省けると思って、地名索引づくりに乗り出したのである。

まずは四千四百枚あまりの地図を買って、そこに経緯度を示す線をつけていく。県境、市町村の境を調べて、色別のラインを引く。こうした基礎作業をした上で、地図を学生アルバイトに手渡し、そこに載った地名をすべて転記してもらうのである。

ところが、アルバイトによって仕事のスピードも、正確さもまちまちなので、その調整が難しい。特に漢字に対する素養が著しく不足している学生には泣かされた。糠や干という文字は、転記の際、たいてい糖と干になってしまう。ソとンの書き方が区別できない人もいた。結局、最終的には私がすべてのデータに目を通し細かくチェックした。

それでも手に負えないのが、地名の読みである。権現山を「けんげんさん」と読み間違えたり、「槍ケ嶽」を「やらけだけ」と書き記したりと間違いは絶えない。

その程度の誤りなら、こちらでも訂正はできるが、一見なんでもない文字、たとえば「～町」が、「まち」なのか「ちょう」なのかについては、簡単には判断がつかない。かといって現地に行って調査する金も時間ももちろんない。

したがって、読みについて正確を期すのは、残念ながらあきらめざるを得なかった。

◻ ◻ ◻

89年に文部省から助成

最大の問題は、資金の調達である。地名には難しい字が多いため、入力はパソコンでは間に合わず、外部の電算処理会社の大型コンピューターに頼らざるを得ない。もちろん一回打ち込むごとに決して安くはない経費がかかる。このほか、膨大な数にのぼる地図の購入費やアルバイトへの報酬などなど、出費はかさむ一方だ。

しかしこうした前例のない索引づくりは、いわゆる研究とはほど遠く、助成金もなかなかとれない。もちろんいくら将来役立つとはいえ、本業の植物分類の研究費を使うわけにもいかない。

また出版社だって、いつできるかもわからない索引づくりに最初からつき合ってくれるはずもない。

結局、自腹を切ってスタートするしかなかった。幸い私には多少元手があった。東大助教授時代の一九六九年から二年間、ネパール政府薬草局のアドバイザーとして海外赴任したときにためた本給分、およそ一千万円である。家を建てたり、車を買ったりと、いくらでも使い道はあったかも知れないが、結局すべて地名索引づくりにつぎ込んでしまった。

それでも救う神はいるもので、八九年には、やっと文部省の助成金がいただけた。今こうして一息ついているのは、そのためである。

◻ ◻ ◻

「中村」が最多1万5件

全三巻、七千三百ページにおよぶ索引をみた方がよく言われるのは「こんなものをよく一人で作り上げましたね。普通、辞典のようなものは何人かが共同して作るものと思っていた」といったことである。しかし私にしてみれば、資金のあてもない、しかも先の見えない作業に人様を巻き込むわけにもいかなかったのである。今でこそ地名は三十八万件あまりとわかってはいるが、作業中は五十万になるか百万になるか見当もつかなかったのだ。

地名データがそろそろと様々なことがわかってくる。日本で一番多い地名は「中村」で七百十五件。以下「新田」「原」「本町」「本郷」の順になった。また「～沢」という地名が中部以北に多いのに対し、「～谷」という地名は西日本を中心に分布しているという地名研究家、故鏡味完二氏の発見も、地名データベースではっきり裏付けることができた。

前の索引を作った後、思わぬ人から問い合わせが入った。索引をもとに稲に関する地名をすべて拾い上げ、稲の地図を作ったという民俗学の研究者の方とか、自分の親の一代記を書くために全国にある「山崎」という地名を調べ上げた方とか。今回もそんな思わぬ利用の仕方をしてくれる人がいれば、何よりうれしい。

もともと地名索引づくりは、植物分布図を作製する道具をひとまずこしらえようと思って始めた仕事だ。私の目標はあらゆる植物の日本における正確な分布図を作ることなのである。

しかし今までのところその目標は先送りとなって、六十三歳となる私は来春定年を迎える。私だけでなく多くの人が利用できる道具はできたのだからまあ、悔いることはない。その後は自宅に小屋でも立てて、分布図作りに思う存分取り組もうと思っている。（かない・ひろお＝国立科学博物館植物研究部長）

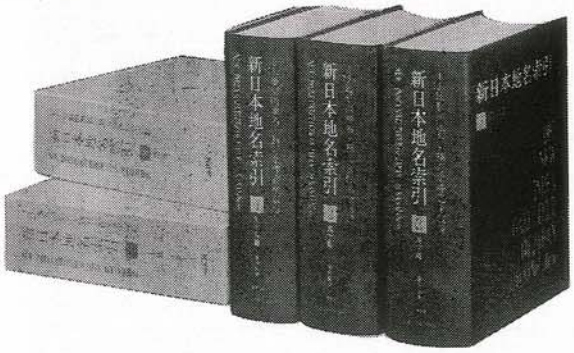
地名分布もはっきり

た地名を構成する文字を一つずつ切り離して数え上げると、一番多かったのは「川」で四万一千件あまり。「町」（約三万三千）、「田」（約二万五千）といった文字を大きく引き離している。さらに地方別の地名分布をはじき出すと、例えば「麓」は宮崎県南部から鹿児島県にかけて集中的にみられる地名だとか、「要害」は岩手南部から宮城の北半分に多いといったことが一目で見分けられる。

◻ ◻ ◻

生物地理・民俗・歴史・言語・地名・姓氏
博物学分野"最高の基礎資料"

新日本地名索引・全三巻
金井弘夫 編
アポック社出版局 刊　B5判変形 全三巻7,389頁
総発売元 丸善　155,000円(分売せず)



＜鬼神＞

およそ、ひとりの人間のなした仕事とは思われない。鬼神の手がくわわったか、じしんが鬼か。なんとも物凄い成果が目の前にある。

列島全域の地名が集められている。字名までふくめて約三十八万五千。県名・市町村名だけでなく、緯度・経度も記される。公園・スキー場・ロッジはいうにおよばず、学校・診療所から霊園まで、すべて掬いあげられ、分類され、網羅されている。資料として使った国土地理院の地形図（2万5000分の1）が、四千四百余枚にものぼる。

これを、ひとりでやってのけた。地名を拾いあげるにあたって学生を五、六人雇ったが、「千」が「干」になる。「糠」が「糖」になる。最終的には全部、じぶんでチェックした。

植物学が本業である。標本と採集地を照合し、分布図を作る。しかし地名が地図でみつからないこともある。探しそこねか、地図にない地か。索引があれば確認は楽だが、そんなものはない。ないものは、じぶんで作るよりない。それで作った。

国立科学博物館の植物研究部長のこの仕事は、素人目にも驚異である。

＊

＜照応記①佳字＞

姓氏研究家の文学博士・丹羽基二氏に会いにいった。博士も独行で、全国の姓約十三万四千を集め、姓名辞典を編んだ鬼のようなひとだ。博士のみるところ、われわれの姓は八割以上、地名に由来する。『索引』で、地名と姓を照応し、ルーツ探しをはじめ、楽しもうというつもりである。『索引』を携行するのは、かんべんしてもらった。なにせ三巻あわせて七千三百余ページ、重量十一キロにおよぶ。博士はすでに購入ずみときき、厚かましくも、それを使わせてもらうことにした。

「えらい仕事ですよ、これは。私も変人だといわれるが、金井博士も相当なものだ」

のっけから博士は、同志を得たようにご機嫌だ。陽気な大声でエールを送り、さてまず、われわれの差し出した名刺の点検である。

「倉本というのは、山際の出ですね」とはじまった。「倉は、雪を掘って部屋をこしらえて遊ぶのをカマクラというように、洞や穴をうがつこと。鎌倉なんか、だから、あちこち掘りあけたように、地形がうねうねしているでしょ。蔵元といえば室町時代に、金銭や穀類などを出し入れした役人というけども、穴だから酒倉だって、穀物倉だって、なかが暗いわけさ」

すでに、地名と姓の相関図がつきつけられていた。大阪の梅田は埋め田、つまり埋め立て地である。新田しかり、荒田しかり。その姓を持つ者は、新田義貞が上野国、いまの群馬に荒蕪地を開拓して土着した新田太郎の末裔であるように、干拓や開拓とかかわっている、というぐあいだ。

「ただ地名にしろ姓にしろ、

週刊ポスト

飾るからね。埋めるじゃどうも感じが悪いからというので、梅にする。佳字を使う。だけど埋も梅も荒も新も、根は同じです」

聖地への出入りを制す

＜照応記②早計＞

「そういう飾りは、いくらでもあるよ」。

陽気な鬼みたいに昂揚した博士はつづける。

「大岡昇平の〝武蔵野夫人〟に出てくる恋ヶ窪。あれ、ほんとは肥ヶ窪だね。よく肥えた土地という意味。だけど肥じゃ下肥とか肥料を連想させるところもあって、ぐあいが悪い。それで恋をあてた。鯉をあてるばあいもある。じっさい、恋ヶ窪じゃ江戸時代に鯉コクを出したんだよ。その窪はさ、くぼんだのは嫌だというので、久保と飾る。全国の久保さんは、窪地の出身をいうわけだ」

埋が梅、窪が久保、となると桜もまた怪しくなる。『索引』にあたると、桜のつく地名は、桜一字にはじまり桜ヶ丘・桜ヶ峠、桜ヶ池・桜堂など、うんざりするほどある。これらをすべて、桜がよく咲く地だと思いこむのは、早合点ということにならないか。

なる、なる、と博士は合点した。「迫を桜としたところはずいぶんある。迫は谷がしだいにせばまったどんづまりの地をいう。よほど逼迫しないかぎり、ここを田に拓くことはないが、拓いたら、その田は迫田、飾って桜田とよばれる。桜田門というのもこれでね、地名や姓は漢字で考えると、まず、悩まされるね」

＜照応記③精霊＞

きいていると、なにかしら秘密の函を開けたような、夢見心地な気分になってくる。

われわれのうちのひとり、倉本は天草で育った。その村に迫川というどんづまりの地があり、泉が湧いていた。村で最も甘美な水とされ、正月には、村の他の地区からも若水を汲みにくる。この井戸の背後に迫る山中に、山の素・神の元という地名がある。伝承では、ここに村の氏神である阿蘇の神が降りくだったことになっている。迫川の井戸から、ほぼ真東に位置し、ふたつを結ぶ線上に阿蘇神社も位置している。

とすると迫は、その地の精霊が宿る聖地であり、それゆえ水も甘美だったということにもなる。

およそ大きな仕事を前に、脱臼した脳味噌がひねり出した妄想としか思われぬが、そうなんだね！　と、博士は、いよいよ陽気な鬼の様相をあらわにしながらいった。

「迫は、それ以上は人間は入れないという境の地で、そこから奥は聖地ともなった。その奥に源流をもつ井戸の水は美味で当然なんだな」

＜照応記④支配＞

とすると、大迫さんは偉いんだと、われわれは面白がっていいかわした。穴掘りの倉本さんや、涸れた沢を意味する唐沢さんとは、一線を画して豊潤なわけだ。「唐沢」は博士との面談をとりつけた編集者の名前である。

同時に、その境界の地をもって桜田門とし、ここに検察庁・警視庁を置いた、権力の想像力を思いやって、いささか背筋が寒くなった。なるほど権力にとっては、精霊の集まる境の地、聖地への出入り口を制することが、その支配力を、聖性によって裏づけ、高めることになるわけだった。

「名前が地名と深く関係しているということは、姓に、出身地の精霊をまとうという意味があるということです。その証拠に、分村して余所の地に移ったひとは、出身地の地名を名乗ることが多いよ」

見知らぬ地では、新参者は裸も同然だ。故郷の精霊をまとうことが、唯一の庇護の証である。権力は当の故郷の聖地を制することで、これら新参者を掌中にする。

鬼神のなせる業

＜照応記⑤検索＞

この地名と姓名の掌握が、すなわち時の権力の支配を証明する例がある。

東京の赤坂という地名の由来は、一般にそこが坂で、土を削ると赤土が出たからだ、といわれている。しかし、博士によれば、ただ三河の赤坂から狩り出され、江戸建設に従わされた労働者の収容場だったにすぎない。一方、三河のの赤坂は、真実、削れば赤土ののぞく坂の地である。

「東京の地名が姓に結びつくことは、まずないな。江戸はつくられた都市だし、地名も姓名も、ほとんど余所から持ちこまれたものです」と、博士はいう。

「都市というのは、つまり、余所者の集合体であり、自然発生的にできるものではないわけで。大阪・京都となるとひらけかたが早いから、東京とちがって、姓に地名の反映がまだ認められますがね」

桜田門や赤坂は、ほんの一例。『索引』にあたれば、東京の地名が、どれほど持ちこまれた地名であるか、たちどころにわかるはずだ。たとえば新宿は、関東地方にゴマンとある地名なのだ。

『索引』は、パソコンを使えば、すぐに分布図が出てくるつくりになっている。発行者の鎌倉・アボック社と、編者の金井博士の協力で、宿のつく地名を検索してみると、千葉・埼玉・茨城・栃木あたり旧・江戸の後背地だ。列島の白地図が黒くなるほど、所在を示す黒点が集中した。

宿という一字だけの地名でも、結果は同じだった。一方、箱根を越えた西側一帯では、ポツポツと数えるほどしかない。日本海側に至っては、皆無に近い。

「宿は、交通がひらけた土地にある。日本海側では、宿よりも峠・越です。京阪から西にみられないのは、大津とか津があるからでね。津というのは、宿よりも古い、交通の要所であり、物の集積所だ」

博士はわれわれにビールを振る舞い、みずからも飲む。

丹羽基二氏

ほとんど鬼殺しをたたえた甕から、柄杓でふるまわれているような心地に陥って、どーんとおぼろになった。

＊

＜民俗＞

いや、凄い仕事だ。三巻十五万五千円は高いが、図書館を利用すれば、コタツでいろいろ楽しめよう。ちなみに丹羽博士の丹は水銀をつくる丹砂の丹、金井博士の金は、明治期まで金属民が信仰した金屋子神の金。近年の民俗学は金属民と鬼のイメージの間に、密接な関係があると証明しつつある。

ふたりとも、やっぱり鬼だった。十一キロもの三巻本を前に、思うのは、われわれの民俗とその時間の作用である。

●倉本　四郎

『新日本地名索引・全三巻』の編者 金井 弘夫氏に聞く

総地名数約三八万件を位置づける

博物学全般にわたる基礎資料としても有効

金井　弘夫氏

日本全国を四四二枚で カバーする国土地理院発行の二万五千分の一の地形図をきっ知だろう。この地形図上に書き込まれている地名約三十八万件を全部拾い、その位置を経緯度で示すという膨大な作業のほか、完成された索引を編集したのが、国立科学博物館の植物研究部部長の金井弘夫氏である。この膨大な索引がこのほど『新日本地名索引』全三巻として、アポック社（〒247 鎌倉市大船二―一四―一三、電話0467・45局五一一九番）から刊行された。

体裁はB5判変型（25㎝×18㎝）、総七三八九頁で、セット価一五五〇〇〇円。発売は丸善。

全三巻の構成は、第一巻＝五十音篇（地名「よみ」）、第二巻＝漢字篇・上、第三巻＝漢字篇・下となっており、第一巻の総地名数は三八四九九件にのぼり、漢字篇は編纂順で、位置のリストを作ってしまえということで二十万分の一の地図を買い込んできたからはじめたわけです」

そして出来たのが、十年前に刊行した「日本地名索引」全二巻（アポック社）であった。しかし、産地がこれでは半分ほどしかわからないことに気がつき、ただちに二万五千分の一で再び同じ作業をつづけた。その作業とはどんなものであったのだろうか。

「買ってきた地図に経緯度の線を引いて、位置座標を書き込み、県や村の境界線を引いて市町村名を拾うという予備作業を経て、アルバイトの学生にこの地図の中の文字は全部拾えということでまかせた。それをある程度チェックしてみたわけです。鳥帽子が鳥帽子になったりしていまして、こういうことはずいぶんあるんです。それはチェックで変るものはチェックしたが、とにかく目をつぶることにしました」

それでは正確さという点ではおとるのではないかと感じられるが、もともとの出発が植物分類学の発想からのものであるんです。二十万分の一の時は県単位に確認の作業をしましたが、今度は数が多ら。間違ってもいいから出しちゃえば、誰かが違っているというだろう。それで次にぞというわけです。

「植物分布図の作成がきっかけに」

金井氏の専門は植物地理学・植物分類学でなぜ地理学者でもない人がこんな膨大な作業をしたのか質問をぶつけて みた。

「大学で卒論をあるところに植物分布図を作ったのです。いろんな植物によってそれぞれのパターンがあり、系統によっても違う。そんなことに興味を持ったんです。それで分布図をもっと作ろうと思うんですが、採集標本のラベルに産地が書いてある。それを地図上に位置づけることができない。分県地図なら、すぐにはめられるが、もとの出発が植物分類学の発想からのものであるんです。

それを使わしちゃうわけです、何の反対給付もないのですから。

「こういう仕事は植物学でもないし、助成金の世界は、それが来てからじゃ間にあわない。先端科学などは助成金で作ることは以外に簡単なことのようである。そういう利用法が本書の価値だともいう。そのほかにも発見はいろいろあった。

「例えば二万五千分の一では、東京という地名はないんです。秋田とかもそうです。地点としてないんです。新宿一丁目とか西新宿とかそういう地名がやたら多くなって、本来の新宿というのがどこかへ行っちゃう。そういう点じゃ、この地名はあまり面白くない。だから昔の五万分の一の地形図がほんとはいいんです。データもとってあるんです。今多くある標本も五万分の一の時代に調べたものなんです。採集地名が、五万分の一の戦前の参謀本部の地図でやるともっとわかるようになるし、古い地名も残っている。新しい地図はみっともない地名がどんどん削られているんです、例えば差別用語の地名とかね」

データベースとしての地名索引ができたのだから当初の目的である植物分布図も比較的簡単にとれるのではないかと素人は考えるが、どうもそうではないらしい。

「まだ植物の方の産地のデータというのが充分にとれていない。それをとって、この地名索引にぶっつけて、位置座標として数字として入れれば植物分布図はあっという間にできることになります」

発見といえばこんな発見もあった。

「パソコンの文字というのはかなりいい加減に作られているということです。衣偏が偏もみんなカタカナの「ネ」になっているんです。あれは文化の破壊だと思います」とパソコンの利点を充分に活用した人の言としてこれは重い。

一九三〇（昭和五）年に台北で生まれた金井氏は一九五四年に東大理学部生物学科を卒業し、植物学教室に残り、七三年に国立科学博物館研究官となり、一九九一年、現職となり、現在に至っている。

「実はこの本を注意よく見ていないんです。本を見なくてもコンピュータを見ればいいんで、どうも本を見ない。目がわるくなってきたんで、細かい字の本は目がチラチラして苦手なんです」

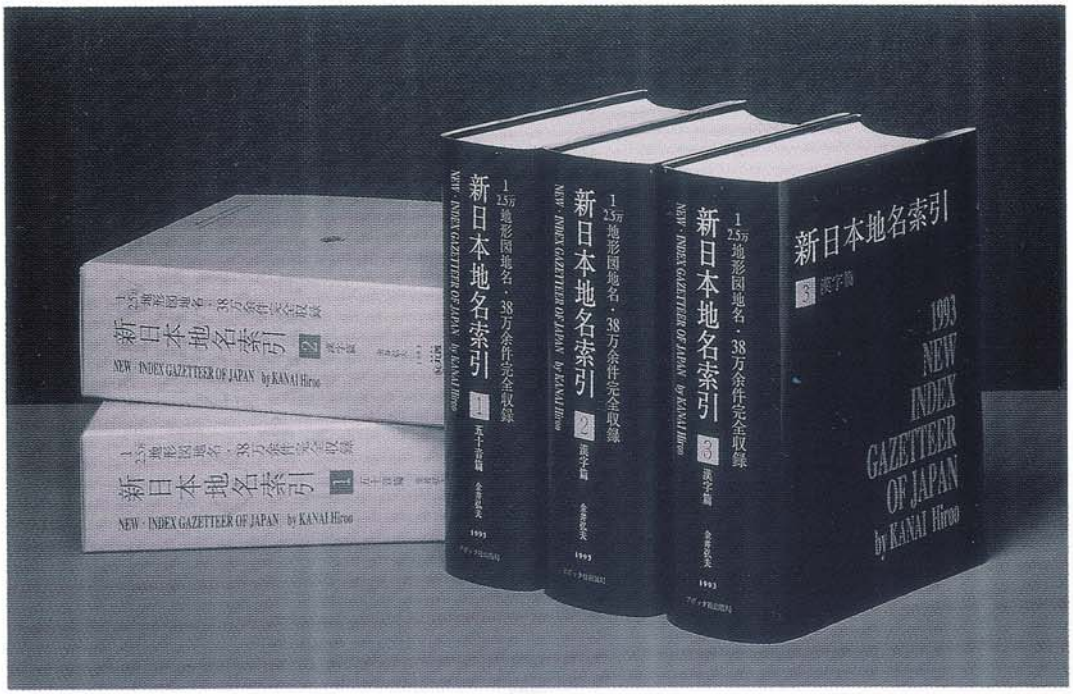
それにしても、個人の永年の作業としては驚くべき忍耐と根気のいるものであったのは想像に難くない。大きな仕事を成し遂げた笑顔をもって金井氏は、東京都新宿区百人町の国立科学博物館分館の研究室で語ってくれた。

「新日本地名索引」全三巻

図1「＊谷」の分布（地名数9763件）

図2「＊沢」の分布（地名数13680件）

と二つの図（図1・2）は本書のデータベースを分布地図作図プログラムKLLPSを用いて出力したもの）でもわかるように東西に見事にわかれてはいるものの、興味深いほどに綺麗にはわかれないという発見もあった。こういう分布図が、この本をデータベースとして作ることは以外に簡単なことのようである。



1/2.5万 地形図地名・38万余件完全収録

『新日本地名索引』全3巻

NEW・INDEX GAZETTEER OF JAPAN　by KANAI Hiroo

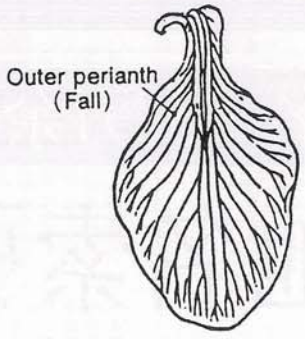
編者 / 金井弘夫（国立科学博物館）
発行 / アボック社出版局・総発売元 / Ⓜ丸善
B5判変形、厚表紙、箱入り、全3巻総7,389ページ
セット価格 / 155,000円

生物地理学、地名研究学分野必携の大索引。4.422枚の2.5万分の1地形図の全地名384.459件を経緯度を付けて完全に収録したリファレンスブックの決定本です。

詳しい内容をご覧になりたい方はカタログをご請求くださるか、
全国の丸善店にてお手にとってご覧下さい。

取扱店
Ⓜ丸善

［本社・日本橋店］〒103東京都中央区日本橋2-3-10　TEL（03）3272-7211　振替東京7-5番
支店・営業所ー東京（お茶の水・丸の内・内幸町・浜松町・アークヒルズ・渋谷・錦糸町・北千住・柏・取手・土浦・船橋）・千葉・八王子・大宮・所沢・新潟／札幌・仙台・盛岡・郡山・筑波・水戸・横浜・静岡・浜松・名古屋・岐阜・三重・金沢・京都・滋賀・大阪・神戸・姫路・岡山・松山・広島・福岡・長崎・鹿児島・沖縄／ニューヨーク・シカゴ・ロンドン



発行　株式会社アボック社出版局